

傾城道成寺

長唄

全詞章

本名題「無間鐘新道成寺」

別題「中山道成寺」「新道成寺」

〔歌〕 われは此世になきがらの、そのままならぬその中に、かはい男をしやばに置き、思ひがけなき死出の山、まよふが中なかのまよひとは、千々に物こそ悲しけれ

仏の道のうとければ、つらい勤めの送る身の、月はほどなく入汐の、煙みちくる小松原、懺悔に罪もはれなんと、中山寺にまゐりけり

嬉しやさらば舞はんとて、あれにまします宮人の烏帽子をしばし借りに着て、すでに拍子をはじめけり

〔鐘尽くし〕 花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん

色は匂へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならん、人里遠き鐘の声、諸行無常の世の中に、恋はまことの菩提の道へ、ひかるるまでの糸竹や

〔身の上語り〕 われも昔はみな人ごとに、娘娘とたくさんそうに言うてたもんな、手習ならひ琴もおぼえ、物縫ひならひ、やがて殿御と添寝の枕

二人寝がちに引きしめて、いと騒々しき風のまに、霞たなびく峰の雲

薨ならべし此の寺は、小夜の中山と承り、初めて伽藍成就の、あまねく十方輝けばとて光明山とは名付けたり
山寺の春の夕暮来てみれば、入相の鐘に花ぞ散りける、入相の鐘に花ぞ散りける

〔鐘入り〕 さる程に、寺々の鐘月をち鳥啼いて、霜雪天にみち、潮ほどなく此の寺の、江村の漁火愁ひに對し、人々眠れば

よき隙ぞと立ちそふやうにねらひ寄り、つかんとせしが、思へばこの鐘恨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶかと見えしが、引つかづいでうせにけり

〔切の段・祈り〕 真砂の数はつくるとも、行者の法力つくべきかと、みな一同に声をあげ、東方にござんぜ明王、さいほうみとくみやうわてんし、ほうくばうこんがうやしやみやうわう

西方威徳明王天子、北方金剛夜叉明王
ちゆうあうだいにちふどうみやうわう

中央大日不動明王、なまくさまんだばさら、せんだまかろしやな、そわたやそわか

左の御手に三日三夜、右の御手に三日三夜、合はせて六日に一日まして

七日御祈念、御経読誦の奇特にまかせ、降魔の利剣は何のこつちや、何のこつちや、力によりてうんだら

たかんまてうがせつしやとく、大智慧ちがしんしや、即身成仏

祈りければ

祈り祈られしや、むづかしい事ども丹精出し、額に汗の玉の数珠すり、みな声そろへ、つかねど此の鐘響き出で、引かねど此の鐘踊るぞと見えし程なく、鐘楼に引上げたり

〔口説き〕 朧月影もさだかに、しどけなく山吹の瀬にほの見え、小棲なりふりほらほら、春風さまはしのびの朝がよい、小川浅ければ裾がぬれそろ、よのふさふさ棲もぬれそろ

物にくるふや浮気涙、間夫の男はつら憎や、抱いて寝たときやわれならで、外の女郎にや
逢はぬといふてだましくさつたが憎やええ
ならぬ誓文くつされ、だましはせぬが引くに引かれぬ非があれば、それは寝てからその言訳をせうぞいの、

ああいやらしい何ぞいの、昔の悪性したらいでのう、今のしなしはおかしやな
是は過ぎにし言の葉の

〔無間の鐘〕 ああ夜昼となき苦しみは無間の鐘、恐ろしや苦しむ無間近づいて、近づいて来世は六つの責鼓謡ふよ
いづく鼓は偽りの契、仇なる爪ごとの引き離れ、いづくにか我が思ふ、忍びねのやわらやわら謡ふよ

まして冥途の修羅太鼓、剣をひつしと植ゑならべ、罪人を追ひまはし、岩石せなに結び付けられて、峰よりどうど
突き落さるれば、骨は微塵にくだかれて、風に木の葉の散ることく

起請誓紙の数々に、恨の鳥集りて、鉄の嘴をならし、銅の爪をとき立てて追ひまはし、追ひまはし
流れの罪科地獄の有様、花も一時月の光も、うつるや夢のうつるや夢の、定めなきこそ浅ましや